

目次

序にかえて——本書を使用する人のために……3

第一章 音声・音韻……9

- 一 単音……11／二 音声と音韻……13／三 音節……14／四 アクセント……16／五 音韻史……18

第二章 文字・表記……21

- 一 文字の体系……23／二 文字の形……25／三 文字の機能……27／四 文字列と表記規則……31／五 漢字の機能……34／六 文字・表記史……38

第三章 語彙……44

- 一 単語……46／二 語義……49／三 語彙量……53／四 語彙の出自と位相……57／五 語彙史……60

第四章 文法・敬語……63

- 一 文法的な考え方……66／二 文の成分……68／三 単語と品詞分類……71／四 活用しない自立語……73／五 活用する自立語……75／六 活用しない付属語(助詞)……77／七 活用する付属語(助動詞)……80／八 文の構造と文の種類……82／九 「は」と「が」……84／一〇 敬語の分類……86／一一 敬語の運用……89／一二 文法史……92

第五章 文章・文体……97

- 一 文章の型……98 / 二 文章の個性……106 / 三 文章史……111

第六章 方言……118

- 一 方言の実態・方言調査……120 / 二 比較方言学……126 / 三 方言地理学……130

第七章 言語生活……148

- 一 言語使用の諸相……149 / 二 変種……161 / 三 言語発達・言語教育……166

あとがき……175

第一章 音 声・音 韻

人間は、自分の感情や思考を表現するのに、音を用いる場合が少なくない。音を用いるといっても、指を鳴らすとか、拍手するとか、足踏みするとかいった動作によって出す音は、言語としての音、すなわち言語音ではない。言語音は、唇・舌・喉などのいわゆる音声器官を用いて発せられるものである。ただし、音声器官を用いても、あくび・泣き声・舌打ち等は、やはり言語音とは言えない。言語音とそれら非言語音との違いは、前

者がいくつかの音を組み合せることによって、さまざまな意味を表わすのに対して、後者は、ある一定の場合に限って用いられるものだけということである。たとえば、カという音は、カミ(紙)・サカ(坂)・ウカブ(浮)・ミジカイ(短)のように、他の音と組み合せられて、種々の意味を表わすことができるが、舌打ちの時のチツというような音は、他の音と組み合せられてさまざまな意味を表わすということがなく、従って、食物を味わう時や残念に思う時などのほかに用いられることはほとんどない。

さて、音声器官によって発音できる音の種類は、微細な違いまで問題にすれば、ほとんど無限であるけれども、我々が言語音として利用する時には、そのうちの比較的少数の音を用いる

にとどまる。また、それらの音の組み合わせ方も、観念的にはかなりの種類が考えられるわけであるが、現実には、言語によってその組み合わせ方にそれぞれ限定が存する。そこで、ある言語を研究する場合、言語音としてどのような音が用いられているか、それらの音はたがいになんか関係になつてゐるか、またその組み合わせ方にはどんな特徴があるかなどの問題を明らかにすることが必要になる。

言語音を研究する場合、まずこれを最小の単位に分解し、それぞれの音の性質を明らかにする必要がある(↓一単音)。ただ、音として違うということがただちに言語の意味的な差異をもたらずとは限らない。従って、ある音的な違いが意味的な差異をもたらす違いであるかどうかを検討しなくてはならない(↓二音声と音韻)。また、実際に発音する場合には、最小の単位がいくつか結合していくつかのブロック(まとまり)をなすのが普通であり、それらブロックとしての性質も問題になる(↓三音節)。さらに、音質の面だけでなく、音の高さ・強さという音量の面からも研究されなければならぬであろう(↓四アクセント)。なお、言語音にも時代的な変化が考えられる。その実態を明らかにし、変化の要因を考えることも、課題の一つである(↓五音韻